
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。無断引用や転載をお断りいたします。
Copyrighted materials of the authors. Works in progress: Please do not circulate
or cite without permission.

アジア太平洋地域における希望の人類学的研究：新たな身体実践が拓く未来

第4回研究会（2025年7月5日開催）報告

日時：2025年7月5日（土曜）14時～18時

場所：東京外国語大学 本郷サテライト 3F セミナールーム

内容：冒頭で代表者の深川が、研究グループの活動状況と今後の研究会計画について、報告をおこなった。その次に、宮崎により、核時代における希望、希望の人類学と＜希望という知の方法＞、近年のクイア理論における希望やフェミニスト理論における希望、そして先住民による先住民研究における希望から、これからの時代における希望の再構想をテーマとする研究報告が行われた。宮崎の報告の後に、参加者全員との質疑応答と全体討論をおこなった。核時代において「救済」や「改善」といった（これまで繰り返し裏切られてきた）「未来の約束」あるいは「抽象的な知の方向性と時間性の転換」としての＜希望＞に留まらずに、「今ここにある具体的な関係性と共生の再創造としての希望」について論じた宮崎の研究発表は、個別報告に留まらず、今後の「希望の人類学」研究会にとって不可欠の重要な視点をもたらすものであった。宮崎の発表をめぐる全体討論を通じて、メンバー全員でこれから「希望の人類学」をさらに進展させていくにあたって、極めて有益な論点を明らかにすることができた。宮崎の報告の概要は、下記の要旨の通りである。

（以上文責 深川宏樹）

報告 1

「核時代の希望——80年目の終末・記憶・遺産——」

宮崎広和（ノースウェスタン大学）

この発表では、核軍縮の推進と核被害をめぐる責任の追求をめぐるアメリカ各地の都市・地域レベルでの取り組みに関するフィールドワークに基づいて、80年を迎える核時代における希望を再想像するためのステップを考える。とりわけ、北米先住民の観点からの未来性

と関係性に関する理論と実践に啓発されながら、「核の冬」という終末の時間性と、既に存在し現在進行形の「核被害」をめぐる記憶と恐れの間での持続的な緊張関係を検証する。

In this presentation, I explore steps toward reimagining hope in the Nuclear Age, 80 years later, drawing on my ongoing fieldwork concerning local efforts to promote nuclear disarmament and justice in various U.S. cities and localities. Inspired by theories and practices of futurity and relationality in Indigenous North America, this exploration involves examining the persistent tension between the temporality of the “nuclear winter” apocalypse and the temporality of memory and fear of past and ongoing nuclear harm.

(以上文責 宮崎広和)

この発表では、上記要旨に加えて、さらに宮崎自身による『希望という方法』の著者解題が行われた。『希望という方法』は、いわゆる日常的な意味での希望を「テーマ」として扱ったものではなく、むしろ、より抽象的な知の方法としての〈希望〉、すなわち、人類学の民族誌と理論に含まれる知の時間的な方向性を、過去志向から未来志向へと不断に転換する〈方法〉を論じたものであった。同書は、ベンヤミンを引用しつつ、メシアニックな歴史観を通じて、過去の記憶（暴力とその結果としての廃墟）と未来の希望との関係性に着目し、歴史を線形ではなく、断片や瞬間の連続として捉える視点を導入した。さらに同書は、ブロッホの〈まだない〉の哲学に応用し、未来を常に開かれた可能性——〈もうない〉あるいは〈すでにある〉から〈まだない〉へのたゆまぬ展開——として捉え、それを落胆と失望の連続という歴史プロセスとの関係において把握する視点をも導入するものであった。そうした視点が、フィジー先住民の知識に顕著な、交換における完結と未完結（開放性）のダイナミズムとパラレルに並置されることで、新たな知が創発するプロセスが、同書では実現されていた。

さらにこの発表で宮崎は、核廃絶が現実から遠く実現困難であることと、（核実験などより）現に起こっている核被害（健康被害、環境被害）の不確実性と不可避的な認知の部分性から、核時代における希望の欠如を指摘し、そこから希望を再構想する必要性について論じた。そのために、まず宮崎は、ブロッホの関係性としての希望論を援用しつつ、日常的なクイアな出会いと関係性の内に希望と未来を再発見する、近年のクイア理論の動向に着目した。さらに次に先住民による先住民研究をレビューし、土地、川、海といった非人間的存在も「親族」とし、その関係性そのものが希望であり未来性であるとする論点や、過去（祖先）・現在（生者）・未来（子孫）の間でのフィクション的な対話＝時間と空間を超えた反事實的（counterfactual）な対話を行うことで、祖先（過去）や子孫（未来）の視点から、対話的な関係の内で現在の責任と倫理を問い直すべきとする論点が、これからの希望論に必要不可欠であることを論じた。そして最終的に、「今ここにある具体的な関係性」を再創造し、再構築することそのものが、希望や未来性につながることを考察することで、『希望という

方法』の知の時間性を問う観点から、より具体的な関係性の内における未来と希望を再構想する必要性を説いた。その具体的な関係性の内においては、「誰のための知か」、「誰のための希望か」という点が、決定的に重要な問いとなる。従来の「希望の人類学」は、この点を看過してきたのであり、そうした問いを「自らのために知を創造する」先住民による先住民研究から、人類学も学ばなければならない。そのとき「希望の人類学」は、一般論として「人類学の進歩」や「学問の進歩」に貢献するに留まらず、自らと具体的な関係がある人たちのために「書く」営みとなり、そこに未来の共同作業、すなわち希望が生まれるのである。

（以上文責 深川宏樹）